



典座教訓／紙本墨書／縦 25.2×横 16.6 cm／室町時代（原本：嘉禎 3 年〈1237〉）

『典座教訓』は、嘉禎 3 年(1237)春、深草（京都市伏見区）の興聖寺で道元禅師が撰述したものである。典座とは、禅宗寺院の役職の一つで、僧侶の食事を司る。同書では、典座という役職の重要性、その心得、さらには食事の意義・調理法・作法などを説く。特に、阿育王山広利寺の一老典座との対話や、天童山の用典座との対話が印象深い。これら対話によって、道元禅師は、生きた仏法に接し、仏法を学ぶということ、仏道を修行するということの真義に目を開く最初の契機となったという。なお、典座の心構えとして説かれる、喜心（喜ぶ心）、老心（親切な心）、大心（平等の心）の三心は、今日もしばしば取り上げられている。

本資料は道元禅師 250 回忌にあたる文亀 2 年(1502)に書写されたもので、永平寺に伝世されてきたものである。